

● 沖 縄

上 地 隆 裕

一時は収束（終息）に向かっているのでは？と、期待と願望を半々に抱かせつつあったCOVID19。だが、結局いずれも裏切られることとなる。

というのも年度末期には「新手の株＝オミクロン」まで登場。その勢いは増すばかりとなり、新年になだれ込む結果を招くことになるからだ。

さて話を元に戻して、2021年度の本県洋楽界は総じて、前半がCOVID19の蔓延で予定された実演会の大半がほぼキャンセル、後半がやや持ち直したものの、同ウィルスの再来襲で、中止または延期が相次ぐというという形で推移した。

それでも実演家および音楽ビジネスと関わる本県の人々は、その見えない敵＝ウイルスにまさしく猛烈な抵抗を試み、演奏芸術の「錬磨と実演会」の機会を死守し続ける。彼や彼女達は、「ソーシャル・ディスタンス」に配慮し、今や身体の一部に変貌した感のあるフェイス・マスクを常時装着し、人数を制限しながら「発表の現場」を保持し続けるのだ。

そのような努力の末、ようやく演奏会告示まで辿り着きはしたものの、大半がキャンセルの憂き目に遭ってしまうという日々を過ごす。が、本県の演奏芸術を愛する人々は不屈である。そしてそのような強い心情がついに形となって現われた。特に以下の三つの出来事は、出先の見えない闇夜のような世界にいた本県楽壇に、いきなり差し込んだまぶしい陽光の役目を果たす。

その三つとは、まず一つ目が「本県唯一のプロ楽団を宣言した琉球交響楽団（以下琉響）の本土初公演（東京サントリー・ホール）」、二つ目が「文字通り世界最高峰のチェリスト＝ヨーヨー・マの来沖ソロ公演（我が国で唯一）」、そして最後の三つ目が「那覇文化芸術劇場“なはーと”」の完成である。これらの出来事はいずれも「本県洋楽界に未来への希望を抱かせる」インパクトを發揮し、同時に歴史的な大事件と称して良いものだ。

付言するとまず琉響の東京初公演（6月21日）は、我が国楽壇の中心地「サントリーホール」に乗り込み、全席売完という奇跡的成功を収め、その認知度を全国的にしたし、（ピアノ独奏者に辻井伸行）、続くヨーヨー・マの来演（11月3日）は「バッハ・プロジェクト」と銘打った「J・S・バッハの無伴奏チェロ組曲全曲」の公演（同公演は3回の延期を経ての、しかも会場を変更しての試み＝当日の会場は「1万人収容の“沖縄アリーナ”。コロナ禍のため、収容人数を5千人に減らしたが、それでも満席の公演となった）、そして最後は「演奏芸術家にとって自らの演奏能力を補完する大事な楽器の一部」ともいえるコンサート・ホール＝“なはーと”（その意味するものは「ハート＝HEART＝が喜ぶアート＝ART＝のちから）の竣工（柿落しは10月31日）である。同劇場は「約1600席」の大劇場、「約260～300席」の小劇場を備えており、未来における「本県の演奏芸術のメッカ」として機能する。

さて全てはAfter COVID 19ということになるが、その時、上記三つの出来事が本県洋楽壇にいかなる効果を齎すかを考えると、興味は尽きない。とはいえ本県出身の演奏芸術家たち、およびその関係者たちは、確実に更なる飛躍及び飛翔を期して、

自らの芸術の錬磨にいそしみ、今や遅しと出番を待っている。

2021年度のシーズンを通し、県内外を拠点にする大中小の演奏団体、個人で、特に目立った活躍を見せたのは次の通りだ。琉響、沖響、沖縄フィル、琉球フィル、沖縄オペラ・アカデミー、栗国淳（演出）、砂川涼子（S）、上地さくら（チェロ）、渡久地圭（フルート）、また国内外のコンクールでの入賞者＝佐藤健詞郎（伊・国際打楽器コン・マリimba部門、1位なしの2位）、宇根康一郎（日本音コン・クラリネット部門2位）＝も出た。

数少なかった本土からの主要演奏家による公演で注目されたのは、宮田大・大萩康司のデュオ、葵トリオそしてショパン・コンクール準優勝者の反田恭平らであった。